

仏に（三十二相有り）皆色法也。最下千輻輪より終無見頂相至までの三十一相は可見有対色なれば書つべし作つべし。梵音声の一相は不可見無対色なれば、（書くべからず作るべからず）。仏滅後は木・画の二像あり。是三十一相にして梵音声かけたり。故（仏に非ず）。又心法かけたり。生身の仏と木・画の二像を対するに天地雲泥也。何涅槃の後分には生身の仏と滅後の木・画の二像と功德齊等なりといふや。又大瓔珞経には木・画の二像は生身の仏にはをとれりととけり。木・画の二像の仏の前に経を置けば三十二相具する也。但心なければ三十二相を具すれども必仏にあらず、人天も三十二相あるがゆへに。木・絵の三十一相の前に五戒経を置けば此仏は輪王とひとし。十善論と云を置けば帝釈とひとし。出欲論と云を置けば梵王とひとし。全仏にあらず。又木・絵二像の前に阿含経を置けば声聞とひとし。方等・般若の一時一会の共般若を置けば縁覚とひとし。華嚴・方等・般若の別・円を置けば菩薩とひとし。全（仏に非ず）。大日経・金剛頂経・蘇悉地経等の仏眼・大日の印真言は、名は仏眼・大日といへども其義は（仏眼・大日に非ず）。例せば仏華嚴経（円仏には非ず）。名にはよらず。三十一相の仏の前に法華経を置たてまつれば必純円の仏云云。故普賢經に法華経の仏を説云、（仏の三種の身は方等より生ず）文。（是の方等は方等部の方等に非ず）法華を方等といふなり。又云、（此の大乗経は是れ諸仏の眼なり。諸仏は是れに因つて五眼を具することを得たまえり）等云云。
 法華経の文字は仏の梵音声の不可見無対色を、可見有対色のかたちとあらはしぬれば、頭形の二色となる也。滅せる梵音声かへて形をあらはして文字と成て衆生を利益する也。人の声を出すに二あり。一

には自身は存ぜざれども人をたぶらかさむがために声をいだす。是は隨他意聲。自身の思を声にあらず事あり。されば意が声とあらはる。意は心法、声は色法。心より色をあらはす。又声を聞いて心を知る。色法が心法を顯也。色心不二なるがゆへに而二とあらはれて、仏の御意あらはれて法華の文字となれり。文字變て又仏の御意となる。されば法華經をよませ給はむ人は文字と思食事なかれ。すなはち仏の御意也。故天台釈云、「請を受けて説く時は只是れ教の意を説く。教の意は是れ仏意、仏意即ち是れ仏智なり。仏智至りて深し。是の故に三止四請す。此の如き艱難あり。余經に比するに余經は則ち易し」文。

此の積の中に仏意と申は、色法ををさへて心法といふ積也。法華經を心法とさだめて、三十一相の木・絵の像に印すれば木・絵二像全体生身の仏也。草木成仏といへるは是也。故天台は「一色一香無非中道」と云云。妙樂是をうけて釈に、「然るに亦俱に色香中道を許せども、無情仏性は耳を惑わし心を驚かす」云云。華嚴の澄觀が天台の一念三千をぬすんで華嚴にさしいれ、法華・華嚴ともに一念三千。但華嚴は頓頓さきなれば、法華は漸頓のちなれば、華嚴は根本さきをしぬれば、法華は枝葉等といふて、我理をえたりとおもへる意（山の如し。然りと雖も）一念三千の肝心、草木成仏を（知らざる）事妙樂のわらひ給へる事也。今の天台の学者等、我一念三千を得たりと思ふ。（然りと雖も）法華をもて或華嚴に同じ、或大日經に同ず。其義を論ずるに（澄觀の見を出でず。善無畏・不空に同ず。詮を以て之を謂わば）今の（木・絵二像を真言師を以て之を供養すれば実仏に非ずして権仏なり。権仏にも非ず）。形は（仏に似れども）意は本の非情草木也。又（本の非情の草木にも非ず）、魔也鬼也。真言師が邪義、印・真言と成